

保守バプテスト同盟

# ビジョン 2030 宣言文

2018 – 2030

(宣言文および解説)

## [経緯]

同盟は、これまで中長期の宣教協力推進の事業として「100 教会設立運動」(1676-1995 年)、「倍々運動」(1991-1995 年)、「ハーベスト 2010」(2001-2010 年)を掲げ取り組んできました。

ハーベスト 2010 の終了にあたり、2011 年 5 月の総会で新たな長期計画を提案することになり、ビジョン策定委員会を形成し、担当役員を中心に話し合いが進められました。その結果、2014 年に同盟 50 周年を迎えることを踏まえ、長期的なものはその節目からスタートする方が望ましいということで、短期プロジェクトを組むこととし「グリーンリボンキャンペーン」が始まった。このプロジェクトでは、(1) 同盟諸教会の結びつきを強めるために相互理解を増進すること(フェスタの各地巡回方式、講壇交換の推進)、(2) 諸教会および会員たちが宣教協力に関与する機会の提供(国内外への伝道チームの派遣など)、(3) 次世代の働き人を生み出し、育てて行く取り組み(献身者大会のようなもの)が提言され、同盟役員会でも具体的な計画案を作成しました。

2011 年に起こった東日本大震災の影響によって取り組みの見直しがなされることになりました。しかしながら、結果的にはフェスタもある程度の巡回が重ねられ、被災地への支援チームの派遣やキャラバン伝道、CB ジャパンを通しての世界宣教への機会、河口キャンプ(後に U 4 0・U 6 0・O 6 0 等へ拡大)、教育委員会の再起動と同盟みらい大会の実施へと、当初の狙いは一定のかたちで達成されました。

一方、50 周年となる 2014 年にスタートさせる予定だった中長期計画は、やはり震災後の対応で手一杯となったために取りかかることができずにいました。

そこで、2017 年度同盟総会において、次期中長期ビジョン策定に向けた取り組みをすることが承認され、「同盟諸教会が日本や世界の宣教に継続的に貢献するための道筋となる宣言文のような形で」(2017 年度総会資料 p.25)まとめるため次期ビジョン起草委員会が委嘱されました。

50 周年記念誌の座談会メンバーを中心に選ばれた起草委員会では、2017 年総会後のチームワークミーティングでの発題とディスカッションから得られた意見や課題を次期ビジョンの中心的な論点として検討を始めました。

起草委員会による文案を検討し、委員会への意見を送付。その後、2018 年 3 月の同盟役員会に提出された最終案を了承し、同盟総会への役員会提案とすることを決定。同年 5 月 21 日の 2018 年度同盟総会において審議の結果、採択されました。

## [起草委員]

佐々木真輝(北上聖書バプテスト教会・議長)

金野正義(恵泉キリスト教会・書記)

大友幸一(塩釜聖書バプテスト教会)

森恵一(保守バプテスト津田沼教会)

近藤愛哉(盛岡聖書バプテスト教会)

# ビジョン 2030 宣言文

「こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地にわたり築き上げられて平安を得た。主を恐れ、聖霊に励まされて前進し続け、信者の数が増えていった。」

使徒の働き 9章 31 節

ビジョン 2030 を掲げる目的は、(1) 保守バプテスト諸教会の交わりと協力の土台を確認し、(2) 今そして将来どのようなことに直面しようとしているかについて、共通の認識を持ち、(3) この宣言文に同意する諸教会がそれぞれの確信に従って宣教のビジョンを持ち、その実現のために互いに励まし合うことを確認し、内外に宣言するためのものです。

## 序文・私たちの交わりの土台

私たち保守バプテスト同盟諸教会は、全世界のイエス・キリストのからだなる教会の一員として、また保守バプテストの信仰と歴史、情熱を受け継ぐ者として、イエス・キリストを通して成し遂げられる生ける神の救いの目的に対する献身を表明します。急速な変化の時代にあっても、罪ある人間の現状と救いの必要、キリストの福音の確かさを確信し、注がれた神の愛への応答として、互いの多様性と一致を保ちつつ、大宣教命令に対する私たちの応答と決意を新たにします。

## 五つの献身と課題

1. 私たちは、教会に託された世界規模の神の宣教のわざに献身します。特に震災後に与えられた福音理解の深まりと、豊かな多様性と協力関係、明らかにされている課題を踏まえて宣教のために協力していきます。
2. 私たちは、次世代育成の働きに献身します。これまで与えられてきた大きな恵み、今与えられている祝福が、次の世代においても豊かに注がれ、喜び楽しむことができるために、いま直面している現状を理解し、示されている課題に協力して取り組みます。

3. 私たちには、宣教と教育に益する様々な働きやネットワークが、主の恵みとして与えられていることを感謝して受け止め、宣教の働きと次世代育成のために相応しく用いることを決意します。
4. 私たちには、法人格取得、同盟の組織、教職者の倫理、神学的課題等、未解決の課題があることを認め、今後の宣教協力のために一致して解決に取り組むことを確認します。
5. 私たちは東日本大震災から学んだ事柄、経験した恵みを畏れと感謝を持って受け止め、教会の日々の働きや将来への備えのために、また与える者となっていくために、具体的に取り組んでいきます。

## ビジョン 2030 の提言

私たち保守バプテスト同盟諸教会は、上記の諸課題への献身と責任を自覚しつつ、2030年までに同盟が取り組むべきこととして以下の内容を中心とする「ビジョン2030」を提言し、同盟総会の決議のもと、宣教協力の推進と次世代育成の前進に取り組み、互いに励まし合います。

### 1. 宣教協力について

私たちに委ねられた宣教の使命を果たすため、2030年までに、少なくとも20の教会形成を目指す開拓伝道を推進する。またその推進のために必要とされる開拓伝道基金の拡充を進める。

### 2. 次世代育成について

宣教の働きが将来にわたって継続するため、また教職者の高齢化に対応するため、2030年までに、少なくとも30人の牧師を輩出する事を目指す。そのために次世代育成基金、神学生奨学金の拡充、任職委員会の効果的な活用を推進する。

### 3. 与えられている恵みについて

私たちに与えられている恵みとして、関連する各働きやネットワークを宣教と次世代育成に効果的に用いるために、定期的に連絡会議等を開催し、協力を推し進める。また退職教職者のネットワーク形成を後押しする。

#### 4. 未解決の諸課題について

私たちは未解決の諸課題のために一致して取り組み、問題を次世代に先送りしないことを決意する。そのためにそれぞれの課題について学びの場や情報の提供、超教派の関係機関等との連携など、必要な取り組みをする。

#### 5. 震災経験を生かす

私たちは東日本大震災を通して経験したこと、学んだ事をまとめ、これからの教会の歩み、宣教の働き、協力のあり方などに生かすために具体的な作業を始める。

### 私たちの決意

保守バプテストに属するそれぞれの教会は、ここに示された「私たちの交わりの土台」「5つの献身と課題」「ビジョン 2030 の提言」に同意し、主の導きによって各々の果たすべき役割が明らかにされるよう祈り求めます。

また私たちは、各々に与えられるビジョンや願いを互いに共有し、主が与えてくださる多様な働きを尊重し、喜び、祈り、励まし合います。

2018年 5月 21日（総会決議日）

# ビジョン 2030 宣言文・解説

この「解説」では、同盟次期中長期ビジョンである「ビジョン 2030 宣言文」の理解を深めるため、「序文」と“五つの献身と課題”、“提言”について解説します。

## 序文・私たちの交わりの土台

*“私たちは、全世界のイエス・キリストのからだなる教会の一員として、また保守バプテストの信仰と歴史を受け継ぐ者として、イエス・キリストを通して成し遂げられる生ける神の救いの目的に対する献身を表明します。急速な変化の時代にあっても、罪ある人間の現状と救いの必要、キリストの福音の確かさを確信し、注がれた神の愛への応答として、互いの多様性と一致を保ちつつ、大宣教命令に対する私たちの応答と決意を新たにします。”*

そのために、私たちの交わりと協力の土台を以下のように確認します。

### 私たちが継承する歴史

バプテスト教会は宗教改革の原理である、「聖書のみ・信仰のみ・万人祭司」の立場を堅持した 17 世紀の英国バプテスト教会を源流に持っています。後に米国で起こった自由主義神学との対峙を経て、聖書を唯一の権威とする福音的信仰を重んじたバプテスト諸教会は、その信仰の立場を守りつつ宣教の使命に応えるために協力することを決意し、保守バプテスト外国伝道協会 (Conservative Baptist Foreign Mission Society / 現 World Venture) を結成しました (1943 年)。

戦後 (1947 年)、日本での宣教を開始した保守バプテストの宣教師たちは、教会の少なかった東北地方に焦点をあて、宣教の困難な地域と言われる町々へと福音を携え、教会を生み出すべく多くの労苦と祈りを捧げてくださいました。

派遣された宣教師たちによって日本に生み出された諸教会は、自ら宣教の協力を進めるために、日本における保守バプテスト同盟を結成しました (1964 年)。

東北各地に多くの教会が生み出され、東北を拠点としつつ、1964 年より関東 (水戸)、1973 年より首都圏での伝道が始められ、現在は関東・首都圏にも多くの群が生み出されています。また 1993 年には長崎での宣教が始まりました。

## 私たちが継承する信仰

私たち保守バプテスト同盟は、その基盤をただ聖書にのみ置きます。この信仰が意味するところは、私たちの信じる事柄をたえず聖書に立ち返って確認し、刷新し続けるとともに、実践において、伝統や慣例を尊重しつつも、その拠って立つ原則を聖書に求めることを意味します。同時に、聖書にのみ基盤を置くという態度は各個教会がめいめい信じるところを行えば良いというような安易なものであってはならず、先達の真剣な学びの成果を尊重しつつ、聖書に照らして共に検証し、共に受け止めてゆくべきものと信じます。

また私たちは諸教会の主体性と独立性を重んじます。私たちは保守バプテストの交わりの中にあり、宣教のために協力し、さまざまな資源とビジョンを共有しますが、諸教会の具体的な取り組みはそれぞれの主体的な判断と責任によってなされるべきであると信じます。それとともに、私たちは分離主義や狭量な各個教会主義を主張せず、キリストのからだに共に属するものとして、保守バプテストの交わりのみならず、広く福音的な信仰を共有する諸教会、諸団体とも積極的に交わり、励まし合い、協力することは、一つとなることを願われた主のみこころにかなうことであると信じます。

## 私たちが継承する情熱

保守バプテストの交わりと協力を特徴づけるものは、宣教の情熱とそのダイナミズムといえます。同盟が設立されてから、今に至るまで、100協会設立運動、倍々運動、ハーベスト2010、グリーンリボンキャンペーンといった取り組みの中心には常に宣教への情熱がありました。このことは今後も最も強調すべきことと信じます。

私たち保守バプテスト諸教会は、すでに教会が多数存在する大都市よりは、宣教の困難と言われる地方都市や農村部、教会未設置地域に目を向けることを当然のこととして来しました。この視点と精神は初期の保守バプテスト宣教師たちから受け継ぎ、50年の取り組みを通じて継承してきたものです。

## 変化の時代

私たちの生きる世界は、人々の生き方、考え方、人との関わり方、働き方、社会の構成など、あらゆる面で急速に変化しています。好むと好まざるとに関わらず、教会や教会に属する人々の生活は、そうした変化の影響を受けています。

ことに日本においては、人口減少の時代に突入し、多くの地方自治体が消滅の危機にあると指摘されています。この構造的な変化は未だ1%に届かない日本のキリスト教会の成長と存続にとって大きなリスクとなっています。特に人口減少と少子高齢化の著しい地方においては決して無視できない大きな課題であると言えます。

2011年の東日本大震災によって同盟は大きな影響を受けました。この大災害によって被害を

受けた教会がいくつもあっただけでなく、支援に立ち上がる教会も多く与えられ、教団・教派を超えた働きの中心的役割を果たすことになりました。このことは、保守バプテスト同盟が広く福音派の一員であることを自覚させるとともに、今なお、多くの教会未設置地域に対して宣教の責任があることをも自覚させました。

同盟設立から50年を超えた私たちは、教職者の高齢化、次世代を担う献身者の減少、高齢化する教会の増加という現実直面していることを率直に認めます。

また、近年の神学的潮流、異端・カルトや極端な主張を展開する諸グループの動向について、私たちは個別に対応して来ましたが、幅広く専門的な知見を必要とし、諸教会が連携して対処すべき課題については協力して学び、理解を深め、適切に対応していかなければなりません。

## 変わらないこと

たとえ世界が急激に変化し続けようとも、変わることはない真理があることを私たちは告白します。その確信のゆえに私たちは宣教のわざに取り組み、そのために励まし合い、協力し続けます。

- 人類は失われたままであり、世界は痛んでいる  
人間の罪の問題は変わらずに人類の現実です。たとえ私たちの社会に思いやりや共生の姿勢が見られたとしても、聖書によれば、人類は自らの罪と神への反抗の中にあり、神のさばきのもとに立たされており、イエス・キリストなしには希望がありません。
- 福音は今日も良い知らせである  
イエス・キリストの人としての誕生と生涯、十字架の死と三日目の復活、天に上げられ神の右の座につき、やがて再び来られるという歴史上の出来事と約束は、神が約束された世の救いを成し遂げたことを人類に告げる、変わることはない良い知らせです。このキリストのうちにこそ希望があります。
- 神の宣教のわざは続く  
神の救いのみわざの中心には教会があります。神は世の終わりまで続くご自身の宣教のわざを教会に託してくださいました。宣教のわざは一教会が生み出され自立することで終わるのものではなく、生み出された教会が、それぞれの教会に対する聖霊の導きの中で神の宣教のわざに加わり続け、また次の世代を育成し、その使命を託すことで、福音が世界に満ちるまで続けられます。

## 神の愛への応答

保守バプテスト同盟諸教会の各々の働きと同盟としての活動のすべては、私たちを愛し、今



なお罪の中にあるこの世界を愛して人類と全ての被造物に手を差しのばしてくださっている神の愛への応答としてなされます。私たちのすべての働きと交わりは愛の神への信頼と従順と献身の表現です。

それゆえ、私たちは互いを尊敬し、違いを認めつつも信頼し、ともに神の宣教のわざにあずかります。また、この世界を、神が愛しておられる存在として愛します。そして全世界に、神の愛と、その愛ゆえにお与えになったひとり子キリストを宣べ伝え、人々がキリストにあって生かされ、愛のうちに神と神の家族の交わりを喜び楽しむことができるよう、仕え、励まし合い、献身することを決意します。

## 多様性と一致

保守バプテスト同盟諸教会にはさまざまな違いがあり、神学的にも実践においても多様性があります。それでも私たちは共有している信仰、歴史、価値、目的が、違いよりもはるかに多いことを確信します。

この一致に基づいた多様性は神が与えてくださった恵みであることを信じ、保守バプテスト同盟の強さであることを覚え、これからも一致を深め、互いを尊重しつつ、共に歩んで行くことを確認します。

# 五つの献身と課題

## 1. 私たちは委ねられた宣教のわざに献身します

*“私たちは、教会に託された世界規模の神の宣教のわざに献身します。特に震災後に与えられた福音理解の深まりと、豊かな多様性と協力関係、明らかにされている課題を踏まえて宣教のために協力していきます。”*

### 神の世界規模の宣教

同胞に対する国内宣教、開拓伝道、在外邦人への宣教、海外宣教、在日外国人への宣教は、いずれも神の世界規模の宣教の一部です。各教会は聖霊の導きの中で取り組むべき宣教の課題を見極め取り組みます。このことはグローバリズムが進む世界にあって、ますます真実であることを受け止めます。

### 宣教の包括性

東日本大震災以降、福音宣教の包括性が広く諸教会によって再認識されており、私たちもまたこのことに同意します。

福音はことばによって語られる真理と、福音に生きる教会のわざを通して証しされるのであって、そのどちらも欠かすことのできないものです。福音のことばと共に、神の家族の愛の交わりと一致、隣人への愛のわざが、キリストの救いの確かさを証しするものであることを信じます。

### 伝道の働きの多様性

神の宣教のわざは、聖霊に導かれた各教会の多様な取り組みによって推進されます。クリスチャン人口が1%に満たない日本において、福音に直接触れることのできない多くの人々が残されている現実の中で、教会未設置地域への開拓伝道の必要は今なお優先的な課題です。同時に、既存の教会の周辺にも救いを必要とする多くの人々が暮らし、生まれ来る新しい世代が存在します。それらの人々への伝道もまた同じように重要です。

伝道の働きのあり方は、各教会が与えられた賜物と聖霊の導きへの応答として選ばれるべきものであると信じます。

### 伝道と教会の建て上げ

私たちは、福音が単に罪の赦しを与えるだけのものではなく、キリストの再臨を待ち望みつつ、神の家族の交わりの中で新しく生きることを含んでいると信じます。それゆえどのような伝道の働きも、宣べ伝えることにとどまらず、人々を教会の交わりの中で育成し、教会として建て上げることを目指すべきだと信じます。

また私たちは、教会建て上げの働きを困難にしたり、押しとどめる様々な障害を乗り越えるために、共に重荷を負い、祈り、労します。そのために私たちは、人口減少にともなう社会構造の変化が教会の自立や教職者のサポートにどのような影響があるかを研究し、新たなモデルを見いだすために協力します。

### 教会観の多様性

保守バプテストに連なる教会が増え、また様々な神学的背景を持つ教職者が加えられ、教会の取り組みもますます多様化する中で、教会とはどのようなものであるかについて、また教職者のあり方について多様な理解がある現実を認めます。私たちはこうした多様性が際限なく拡大することには注意を払いつつ、共有できる理解と許容しうる範囲とを謙虚に聞き合いながら、確認し合い、各々の教会観を深めていく必要があります。

### 宣教の主体と協力

神はご自身の宣教のわざを教会にお委ねになりました。それゆえ、宣教の働きの主体は教会にあります。これは様々な伝道計画を具体的に立案し責任をもって実行する主体が同盟ではなく、教職者個人でもなく、各教会にあることを主に意味しています。また教会が主体であるとは、各々の教会が単独で取り組むだけでなく、複数の教会の協力や、地域の諸教会のネットワーク、同盟としての取り組みなど、様々な可能性があることを信じます。

また同盟による諸教会の開拓伝道援助や伝道活動への援助について、働き方の多様性を踏まえた、ふさわしい基準とあり方を確立することを目指します。同盟は諸教会の宣教の働きを力強くサポートするために、開拓伝道基金の拡充を図るなどの取り組みをしていく必要があります。

### 教団教派を越えた宣教協力

すでに同盟諸教会は、各教会レベル、地域レベルで、あるいは様々な働きの領域で教団教派を越えた交わりや協力を持っています。この協力関係は短期的なものから長期的なものまで様々ですが、私たちはこうした教派を越えた宣教協力が実際的に必要であるだけでなく、一つであることを願っておられる神のみこころにかなうものであると信じます。

日本の福音的な諸教会・諸団体においても、伝道協力や援助協力、無牧教会の支援など様々な分野での教派を越えた協力の必要性が叫ばれており、ことに宣教の困難な地域、自立困難な地域での他教団・宣教団体との長期的な宣教協力は検討し、試みる価値のあるものと考えます。

## 2. 私たちは次世代の育成に献身します

*“私たちは、次世代育成の働きに献身します。これまで与えられてきた大きな恵み、今与えられている祝福が、次の世代においても豊かに注がれ、喜び楽しむことができるために、いま直面している現状を理解し、示されている課題に協力して取り組みます。”*

### 子どもをとりまく環境の変化の中で

2016 年末から 2017 年はじめにかけて、教育委員会による「次世代育成の取り組み」に関するアンケート調査が行われました。調査によって浮き彫りにされた私たちの課題は、日本のキリスト教会全体が直面している現状とほぼ同じであるということが分かりました。

家庭環境の変化、学校における部活動の問題や教育内容の変化が子どもたちの信仰や人生観に与える影響は無視できないものであり、諸教会が児童伝道やクリスチャン子弟への信仰継承に取り組む上で大きな課題となっていることを認識します。また教会自身の高齢化や教会学校教師の担い手不足も見られます。

それでも子どもたちへの伝道と着実な信仰継承、神の家族としての教会の中での育成は、教

会の未来の鍵であることを信じ、諸教会の取り組みのために励まし合い、協力します。

### 青年をとりまく状況の中で

中高生や青年たちが教会の次世代を担うキリスト者となっていくよう励まし育てることは、教会にとって幸いであり、また個々の青年たちにとって、主から与えられた全ての善きものを豊かに用い、実り多い人生となっていくものと信じます。

同時に、こうした青年たちをとりまく状況は、労働、経済、情報、娯楽など様々な分野で、多くの同盟諸教会が経験して来た高度成長期やバブル期とは全く異なっており、人生設計や結婚に大きな影響を与えています。私たちはこうしたことを理解し、受け止める必要があります。そして、青年たちがそれぞれの召しに従って歩んで行けるよう、励まし、支えます。

### 家族の課題

次世代育成にとって、諸教会や同盟による取り組みはもちろんですが、各家庭が健全に育まれることは最も重要な課題であると考えます。家族観や実際の家族の形が多様化している文化の中で、クリスチャン家庭も揺さぶられ、子どもたちが聖書的な規範に立った夫婦関係や家庭生活、良いモデルを学ぶことが難しくなっています。急速な少子高齢化や介護の問題、LGBT や同性婚の問題などはキリスト教会の内外を問わず、家族のあり方に大きな影響を与え始めています。もっとも家族をめぐる諸問題は次世代育成の枠の中だけで捉えられるものではなく、宣教と牧会の重要な課題であることも覚えなければなりません。そのため私たちは諸教会が、家族関係の健全化のために努力すべきことを信じ、励まし合います。そのため、子どもや青年をとりまく環境の変化を含めた家族の課題について、学びの場や情報の提供に取り組みます。

### 教職者の高齢化と献身者の減少

教職者の高齢化と献身者の減少は日本のキリスト教会全体に共通する課題であり、保守バプテスト諸教会にとっても無関係の問題ではありません。この課題を放置しておくならば、開拓伝道が進み教会数が増えても、将来的に無牧教会の増加や働きを閉じざるを得ない教会が起こってくる事態をも招きかねません。私たちは次世代育成の働きを、今ある教会とこれから生み出される教会に対する大きな責任として受け止めます。

また教職者自身の退職後の生活に関して諸教会がより深い関心と責任を持ち、教職者自らも備えていけるよう、啓発、情報発信等がなされる必要があります。

### 次世代の教会リーダー育成

教会の次世代リーダーを育成する主体と責任は各個教会にあると信じます。育成の手段としては、従来型の神学校教育の他、「教会主体の神学教育」理念に従った新たな取り組みなど、様々な可能性があります。どの方法を用いるかは各教会と献身者自身に委ねられています。

いずれの場合であっても、次世代の牧師や宣教師、教会リーダーを育成するには、諸教会の個別の取り組みとともに、諸教会が協力して献身を呼びかけ、励ます取り組みが効果的と考えられます。すでに始められている「みらい大会」やキャラバン伝道、神学生援助、キャンプでの奉仕、CBグローバルのネットワークを用いた異文化宣教体験や国際交流などを効果的に組み合わせ、働き人を目指す青年たちが、保守バプテスト全体の良き交わりの中で励まされ、育まれることを目指します。また社会・経済の変化の中で、教職者のサポートのあり方についても柔軟な対応が考えられます。

### 3. 私たちに与えられている恵みの豊かさ

*“私たちに、宣教と教育に益する多くの働きやネットワークが、主の恵みとして与えられていることを感謝して受け止め、宣教の働きと次世代育成のために相応しく用いることを決意します。”*

#### シオン錦秋湖

シオン錦秋湖は宣教師の働きによって錦秋湖バイブルキャンプとしてスタートし、後に宣教団より保守バプテスト同盟に移管されました。長い間、主として青少年の救いと献身の場として用いられて来ましたが、現在は幼児から高齢者までの幅広い世代に多様なプログラムを通して用いられています。

私たち同盟はキャンプ宣教の施設と働きを委ねられた者として、責任をもって相応しく位置づけ、用いていくべきであることを改めて確認します。今後も、同盟諸教会をはじめ、広く諸教会に伝道と教育、献身と休息の場として用いられることを願います。

#### 仙台バプテスト神学校

仙台バプテスト神学校は組織的には同盟とは分離されていますが、理事や教師が同盟の教職者であることや、同盟からも派遣理事を送るなど、歴史的にも組織的にも特別な協力関係の中にあります。

神学校もまた宣教師の働きによって始められ、聖書図書刊行会、聖書図書通信聖書学校とともに、信徒教育から教職者の育成まで、同盟を越えて広く諸教派・諸教会に用いられて来ました。

この約10年の間、神学校は「教会主体の神学教育」を実現するための大胆な変革に取り組んで来ました。同盟と神学校は今後も対話と協力関係を保ち、仙台バプテスト神学校が、同盟

諸教会の中で次世代育成のために効果的に用いられることを願います。

## CBジャパンおよびCBグローバル

CBジャパンは保守バプテスト宣教50周年を機に、世界宣教のために宣教師を派遣し、諸教会が異文化宣教に取り組むことを呼びかけ、励まし、機会を提供するために保守バプテスト諸教会によって設立されました。

一方で、アジア・アメリカの保守バプテスト諸教会との交流、宣教協力は、日本・台湾・フィリピンを中心とする福音伝道会議というかたちで行われ、後により広域的な交わりの場としてCBグローバルが設立され、保守バプテスト同盟もその交わりに加わっています。

CBジャパンの働きと、CBグローバルを通しての交流や協力とは、働きの内容が重複し、人的な資源が競合する形になっている面があり、この現状は改善の余地があると思われれます。

保守バプテスト諸教会の世界宣教の窓口となるCBジャパンも、世界の保守バプテスト諸団体との交わりと協力のネットワークであるCBグローバルも、同盟諸教会が世界宣教に貢献し、若いリーダーたちに訓練の機会を与え、宣教チームの往来によって互いに宣教協力するなど、豊かに用いられる可能性があります。

## 保守バプテスト日本宣教団

1947年に日本における保守バプテストの宣教が始まって以来、保守バプテスト日本宣教団は、70年に渡って宣教のために多様な働きを展開し、日本の保守バプテスト諸教会の自立を助け、また引き続き協力関係の中にあります。

保守バプテストの宣教師たちは、戦後の荒廃した日本で、特に教会の少なかった東北を中心に開拓伝道を推進するとともに、神学校、キャンプ伝道、書籍出版、通信教育など長期的な取り組みを可能にする様々な資源の土台を築き、その多くを同盟に移管してくださいました。

今日、宣教団の働きは開拓伝道だけでなく、ゴスペル、手話訳聖書の翻訳事業、希望の車椅子など多様なかたちで日本の宣教に貢献しています。こうした面での宣教師たちの先見性や賜物の豊かさを感謝して受け止めると共に、日本の諸教会が主体的に宣教の働きに取り組み、大きなビジョンをもって宣教団と協力していくことで、今後も良い結果がもたらされることと信じます。

## 現役を退いた教職者

牧会を後継に譲り現役を退いた後も、健康が守られ、さまざま形で教会の働きに協力が可能な方々は、私たちにとって大切な宝であり、その豊富な経験や賜物は様々な形で用いられるものと期待されます。

退職後に所属教会の名誉牧師や協力牧師など何らかの立場を得る場合だけでなく、有志によ

る自発的なネットワークが形成されるなら、同盟役員会と連絡を取り合いながらより広範囲に諸教会に貢献できる可能性があります。

#### 4.未解決の諸課題

“私たちには、法人格取得、同盟の組織、教職者の倫理、神学的課題等、未解決の課題があることを認め、今後の宣教協力のために一致して解決に取り組むことを確認します。”

##### 法人格取得の問題

同盟の法人格取得の必要性は総会において確認され、承認されました。同盟がすでに行っている各事業の主体として法的に位置づけられる必要性とともに、各種基金の貸付など本来は法人としてなすべき事業の継続、シオン錦秋湖が一時的にバプテスト聖書宣教会の法人下に置かれたままになっている状況を解消するためにも、一日も早くふさわしい形での法人格取得を目指す必要があります。

##### 同盟組織の制度的な限界

同盟が比較的小規模な交わりであった時代に定められた規則や制度、習慣は、規模や地理的に拡がりをもった今日の状況には必ずしも十分とは言えません。

同盟が将来にわたって成長し、拡大していくことを見据えた、地域ネットワークの活用や同盟との関係整理、規則や制度の見直しを進める必要があります。

##### 教職者の逸脱行動への対処

教職者の逸脱行動（ハラスメント、金銭問題など）は、同盟諸教会にとっても無縁のことと考えるべきではありません。教職制度を持たず、諸教会による招聘と任職をもって牧師や教師として認められる現状では、諸教会の中で起こる教職者の逸脱行動が表面化せず、教会内に留められて不健全な状態に追いやられる場合があることを認識しなければなりません。

私たちは、諸教会の主体性、自律性を侵すことなく、こうした問題について、教職者が互いに励ましあい、戒め合い、時には外部の専門家の知見や支援を受けながら、建徳的に関わるあり方を謙遜と知恵をもって模索していく必要があります。教職制度を持つという意味ではありませんが、一人の教職者が任命され、働きを健全に全うしていくための協力やサポートが必要であると考えられます。

## 神学的な課題に取り組む枠組み

保守バプテスト同盟は、宣教の使命とビジョンを共有するだけでなく、信仰を共にする団体ですので、私たちが何を信じるかは、いつの時代においても極めて重要な課題です。

しかしながら、同盟においては共通する神学的な課題に取り組むための枠組みがなく、単発的に学びや課題の紹介が行われる程度になっていました。すでに同盟につらなる教職者の神学的背景は多様化していますので、多様性を保ちつつも、何を持って一つであるかを確認し合い、新たな課題に共に取り組むために、神学的な取り組みの枠組みの必要性があります。

## 5.東日本大震災と同盟

*“私たち保守バプテスト同盟は東日本大震災から学んだ事柄、経験した恵みを畏れと感謝を持って受け止め、教会の日々の働きや将来への備えのために、また与える者となっていくために、具体的に取り組んでいきます。”*

### まとめの作業

2017年3月11日に日本を揺るがした東日本大震災は、私たち保守バプテスト諸教会にとっても大きな経験でした。実際に会堂に大きな被害を受けたり、教会員やご家族の中に被害を受けた方々、原発により大小様々な影響を受けた教会など、被災という側面がありました。

また、青森、岩手、宮城、福島には震災後にさまざまな教会ネットワークが生み出され、同盟諸教会や教職者がそうしたネットワークの要となって奉仕した支援という側面もありました。

同盟としての援助はすでに終了し、当時の対応や支援の内容がまとめられています。諸教会がどのような影響を受け、どのように支援に関わったのかは十分にまとめられていません。震災から年数が経つにつれ、当時の記憶も記録も薄れていくなかで、こうしたまとめの作業は、後世のために必要です。

このまとめの作業には、出来事の記録だけでなく、震災とその後の対応の中で教えられた支援、宣教、組織の様々な視点をも含め、これからの教会の働き、次の大災害への備えに活かされるべきものです。

### 災害に対する援助協力

東日本大震災の支援においては、多くの教団教派が様々な形で援助の手を差し伸べてくださいました。

これまでも私たちは緊急時には祈りを呼びかけ、献金を募り、あるいは同盟予算の中から支援をしてまいりましたが、基本的には内向きなものであり、他団体が被災した場合の対応など



は、諸教会の自発的な動きに任せて来ました。

しかし、私たちは震災を教訓として、同盟としての「災害援助基金」を創設し、大災害への協力ができる態勢ができつつあります。すでにフィリピン台風被害、熊本大地震などに献金を送っています。

今後予想される首都直下地震や南海トラフ地震が現実のものとなった場合には、教会への援助や地域への支援活動は一教団や一教派だけで担えるはずもなく、大震災で支援を受けた保守バプテスト諸教会は、協力して援助のために献金とともに可能な限り人を送るべきです。現在、そうした取り組みのための仕組みはありませんので、できるだけ早く、態勢を整えることが求められています。

## 社会的責任と伝道

震災後に改めて注目されるようになった教会の社会的責任は、教会の現場では支援と伝道の関係性についての様々な問いかけ、取り組みがあり、神学的にも実践においても考察が積み重ねられて来ました。

こうした経験と学びはこれからの宣教に大いに役立ち、様々なヒントを与えるものと信じ、学び、共有します

# ビジョン 2030 の提言

## 提言の位置づけ

提言に含まれる内容は、同盟諸教会が共通して認める必要性、方向性をまとめたもので、各加盟教会のビジョンや活動を縛るものではありません。しかし、この宣言文を受け止めて、宣教の前進、次世代の育成のために、諸教会がビジョンと情熱をもって取り組む応答を期待するものです。

## 「開拓20、牧師30」

具体的な数値目標として20の開拓伝道と30人の牧師の輩出を掲げました。数値目標を掲げることについては、不要であるというご意見から、もっと大胆な数値をとというご意見まで寄せられています。また20/30という数値の根拠を問う質問もありました。

委員会および役員会では、2030年までに20教会、30人牧師という「覚えやすさ」と実現可能な目標を優先して、このような数値を選びました。

## 各教会の役割と同盟の役割

ビジョン2030は同盟の中長期ビジョンという位置づけではありますが、具体的な宣教のビジョン、次世代育成のビジョン、またそれらの計画は同盟が描くべきものではなく、各教会が聖霊の導きの中で描くものであるべきと考えます。同盟の役割は、そうした諸教会の働きを可能な限りお手伝いし、あるいは情報共有の軸となり、励まし合いの場となることと考えています。

また、神学、倫理、同盟組織の課題など、一教会だけではなく、全体として取り組むのが相応しい課題について、同盟がともに学び、話し合う場となることを願っています。

(起草委員会による解説)